石橋信彦教授を悼む

１９９１年8月２１日（水）、熊本工業大学において、Flow Analysis Ｖが世界各地から２３カ国の参加を得て開会された。上野景平教授を組織委員長とし、石橋信彦教授を実行委員長として成功裡に８月２４日に幕を閉じた。８月２４日午後になって、石橋教授が８月２３日午後８時４６分急逝された由承っても、にわかに信じることができなかった。石橋教授は私よりも８才も若くて、その追悼文を認める逆縁を誠に残念に思う。

石橋信彦教授略歴
昭和３年１月２日福岡県生まれ
昭和26年３月九州大学工学部卒業
昭和41年４月九州大学工学部教授
平成３年３月停年により退官
平成３年４月近畿大学九州工学部教授
平成３年８月23日没

石橋教授はフローインジェクション分析法（ＦＩＡ）の将来の発展性を見抜かれ、J.Ruzicka 及び E.H.Hansen : "Flow Injection Analysis "(1981)(John Wiley & Sons, New York) が出版されるや、直ちに与座範政博士と共訳出版された(1983)(化学同人)。

１９８４年、石橋教授はフローインジェクション分析研究会を発足させ、毎年２回の講演会を開催すると共に、Journal of Flow Injection Analysis を年２回発行してきた。同会は１９９０年４月より日本分析化学会のフローインジェクション分析研究懇談会となり、現在に至っている。会誌は本年で８巻を数える。

石橋教授の急逝により、急遽大倉洋甫教授（九大薬）に研究懇談会委員長として本会を引き継いでいただくことになった。

石橋教授とは個人的にも大変親しくしていただいて、多くの思い出がある。日中及び日韓分析化学シンポジウムでは秘書長として大変親切にお世話いただいたこと、非常勤講師として、あるいは喜納兼勇氏（現同仁化学研究所）を介して研究の話を承ったことなど、思い出は盡きない。

石橋教授のＦＩＡでの顕著な業績は、容量分析法をＦＩＡ法に取り込んだことである。多くのＦＩＡは微量成分の分析を目的としたものである。ところが濃硫酸や濃厚水酸化ナトリウム溶液を直接ＦＩＡに注入することによって簡単に定量できる方法が石橋教授により開発された。この方法は酸・塩基反応のみならず、酸化還元反応及びキレート反応にも広く利用できることが示された。このように極めて濃厚な溶液から極めて希薄な溶液までＦＩＡ法によって行うことができるようになった。これはＦＩＡ法の応用範囲を格段に拡張するものである。すなわち、長い歴史をもつ容量分析法はやがてＦＩＡ法にとって代わられるであろう。

石橋教授の播かれたわが国におけるＦＩＡの種が今回の Flow Analysis Ｖ として花開いた。世界各国のＦＩＡ研究者との交流において、わが国の研究は決してひけを取らぬどころか、むしろ進んでいるとさえ思われた。私たちはこれからますますＦＩＡ法の発展に努力してゆきたいと思う。そのことが石橋教授に対する何よりの供養になると信じ、これからの精進を誓い、石橋教授の御冥福を心よりお祈り申し上げます。

岡山理大　　桐栄恭二